

大大阪時代の道頓堀界限

福田 明文, 吉川 眞, 田中一成

The Dotonbori District in the Days of the Great Osaka

Akifumi FUKUDA, Shin YOSHIKAWA and Kazunari TANAKA

Abstract: From the Edo period until the beginning of the World War II, the Dotonbori district had been prosperous as the theatrical quarter where many dramas like Kabuki were performed in. The area image has been added images of a restaurant street and billboards since the end of the World War II. As the famous restaurant “Kuidaore” and the historic theater “Kadoza” has just closed, the district is now changing its image and appearance. However, it is still a symbol of water city, Osaka, so far. Therefore, the authors are collecting, scattered historical materials and utilizing GIS and CAD/CG together to clarify the historical transition of the Dotonbori district.

Keywords: 道頓堀界限 (Dotonbori district), 歴史的変遷 (Historical change), 大大阪時代 (Days of the great Osaka), 空間情報技術 (Geo-spatial information technology)

1. はじめに

江戸期から戦前まで、道頓堀界限は歌舞伎などが興行される演劇の街として栄えてきた。その歴史は江戸時代に舟運や利水のために堀が開削された後、界限の街づくりが始まった。とくに大正時代は、近代建築も立ち並び、モダンで華やかな大大阪時代であったとされる。さらに、大正 14 年の人口においても、大阪市は東京市を抜いて日本最大であり、昭和 7 年まで日本最大の都市を形成していた (橋爪, 2005)。

昭和時代においても堀が開削され、水都と称さ

れてきた大阪は、堀川の埋め立てなどにより、そのイメージを変容させてきたが、道頓堀川は今も水都を象徴する堀川である。また、道頓堀界限においても戦後から現在にかけて「食い倒れ」と「巨大看板」のイメージも加わり、現在のイメージを形成している。しかし、本年 (2008) 5 月に角座が閉館、また、看板人形で有名な飲食店「大阪名物くいだおれ」も 7 月に閉店してしまい、大きくその姿を変えつつある (読売新聞, 2008)。

一方、近年では、市内に残された水の回廊を活用して「水都大阪」を復活させるさまざまなプロジェクトなど、かつての賑わいを取り戻そうとする動きも見られる。このような背景を持つ道頓堀

は今も昔も大阪の象徴であり、その歴史の変遷を把握することで大阪の都市形成過程の一端を把握できるとともに、道頓堀の歴史的価値を高めることができると考えている。

2. 研究の目的と方法

本研究では、GIS（Geographic Information System）を用いて散在する史料や資料を収集し整理・蓄積することで、道頓堀の歴史の変遷を把握することを目的としている。さらに、この過程で得られる知見や資料が、新たな歴史的史料となることもめざしている。その具体的な方法としては、収集した古地図、旧版地図、地籍地図などを現代空間上に田ノ畑・吉川（2004）と同じ手法を用いて定位し、そこから得られる情報を、GISアプリケーションを用いて読み解いている。その結果から、歴史の変遷の把握を行っている。また、地域特性を抽出するため、地価に着目している。さらに、CAD/CG を統合的に用いて大大阪時代の道頓堀境界の3次元モデルの構築を行うことによって、歴史的景観の特徴を把握でき、あらゆる視点からの景観検討をすることも目的としている。

3. 対象地域

道頓堀は、木津川と東横堀川の間位置している（図1）。その歴史は、豊臣秀頼によって開削を命じられた安井道頓とその弟である道トらが私財を投じて行ったことから始まったとされる。開削後は家屋などの建設が行われ、1626年には勘四郎町（現在の南船場周辺）、通称芝居町から芝居小屋が道頓堀の南側に移設された（真銅, 2006）。これが、道頓堀演劇街の幕開けとなった。また、浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座は道頓堀五座と呼ばれ、演劇を楽しむ人々で賑わっていた。道頓堀は、五座を中心とし、それらに付随して芝居茶屋などの飲食街も発達してきた。角座の閉館により五座は全て消失したが、道頓堀境界は現在も大阪有数の繁華街である。

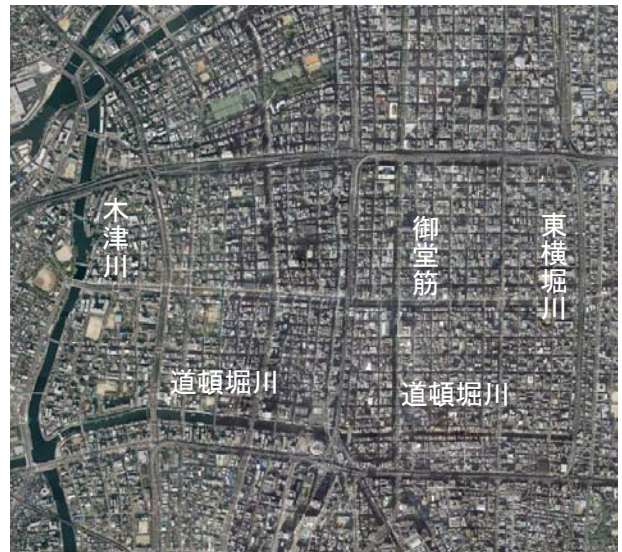


図1 道頓堀の位置

4. データベースの構築

江戸時代から現代に至るまで道頓堀境界の歴史の変遷を把握するために、収集した古地図や旧版地図を現代図上に定位した。定位に用いた現代図は1/2500のDM（Digital Map）データを用いた。地理空間情報として定位した時代は、元禄年間（図2）、天保年間、明治前期、明治後期、昭和初期（図3）、戦後復興期、高度経済成長期、現代（図4）の8期である。

昭和初期の街区を見ると、堺筋と千日前通など道路の拡幅が行われたことが容易にわかる。これらは、市電路線を敷設したためである。また、橋梁においても鉄橋へと架け換えられ、第一次都市計画事業の影響がみられる。



図2 元禄16年の道頓堀境界



図3 昭和初期の道頓堀界限



図4 現代の道頓堀界限

5. 地域特性の把握

5. 1. 地籍台帳・地図〔大阪〕

大大阪時代の地域特性の把握には、原版である1911年（明治44年）に発行された「地籍台帳・地籍地図〔大阪〕」の復刻版を用いた（図5）。原版の台帳は大阪で初めて出版されたものである。その背景は、市街地の急激な膨張に伴って地価が高騰し、土地売買が盛んに行われ、土地の経済的重要性が高まり、その権利者を示す地籍地図・台帳が必要となったためである。また、土地所有状況を網羅的に把握できる本資料の有用性は高いと考える（名武, 2006）。

5. 2. 地価マップ

人が集まる場所は必然的に地価が高くなることに着目して、大大阪時代の道頓堀界限において、どこが華やかで賑わっていたのかを把握、比較す

るために地価マップの作成を行った。なお、地籍台帳に記載されている明治44年の地価に関しては、現代の貨幣価値に換算して地価マップを作成している（図6）。また、現代の地価マップは路線価を用いて作成した（図7）。

地価マップを見ると、明治44年では五座周辺と心斎橋筋で地価が高く、堺筋より東側の地域でも地価は高くなっている。しかし、現代では御堂筋の開通によって、地価の高い地域が西へ移行しているといえるが、道頓堀の歓楽街は今でも地価が高いままである。



図5 地籍台帳・地図〔大阪〕

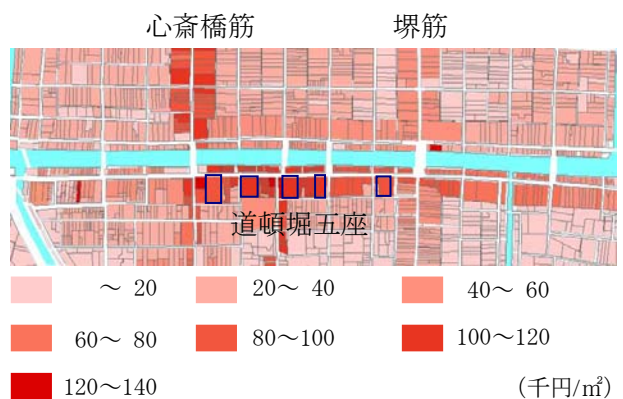


図6 明治44年の地価マップ

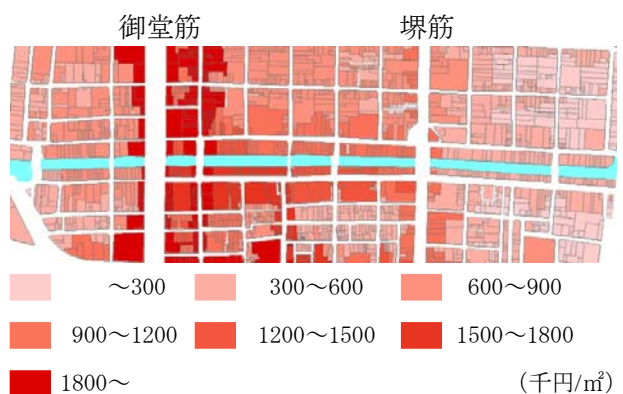


図7 現在の地価マップ

6. 3次元モデルの構築

大大阪時代の道頓堀をより視覚的に把握するために、モダン道頓堀探検（橋爪, 2005）に掲載されているスケッチ（図8; 図9）や古写真（アーカイブス出版, 2007）などの資料を参考にして、奥住・吉川（2000）の手法を用いて、道頓堀通りの3次元モデルの構築を行った。これらの作成した建物モデルを配置し、テクスチャをマッピングした後、レンダリングを行っている（図10）。また、その建物モデルの配置については、地籍地図に描かれている敷地を参照して、正確な位置へ定位している。3次元モデルを構築することによって、現代の道頓堀が大大阪時代ではどのような景観構成をしていたのかを把握することができ、その文化的価値を見出すことができたと考えられる。



図8 大正9年のスケッチ（パノン付近）

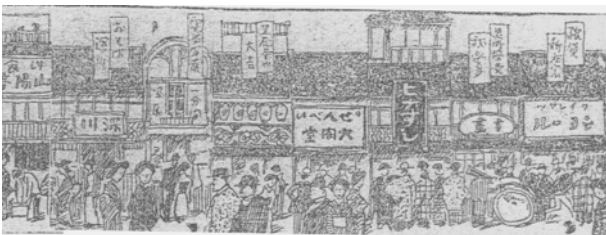


図9 大正9年のスケッチ（難ずし付近）



図10 3次元モデル

7. おわりに

道頓堀境界の地理空間データベースを構築したことにより、道路の拡幅や堀川の埋め立てなど、現在に至るまでの都市形成過程の一端を垣間みることができ、新たな資料として活用することも可能となった。さらに、地価を対比させることにより、位置的な重要度、つまり、地域特性の抽出ができたと考えられる。GISを用いて歴史的変遷を把握し、過去の道頓堀を知ることに加えて、3次元モデルを構築することで、あらゆる視点からの景観検討も可能になったと考えている。

今後の課題として、他地区との地価マップの比較も必要であり、3次元モデルの精度の向上と添景の配置なども必要であると考えている。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、大阪大学総合学術博物館の橋爪節也教授には、大正時代における道頓堀のスケッチなど、貴重な資料の提供をはじめとして、多くのご協力をいただいた。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- アーカイブス出版編集部（2007）『昭和の大阪郷愁のあの街この街』，アーカイブス出版。
- 奥住洋介・吉川眞（2000）元禄空間の復元，「地理情報システム学会講演論文集」，9，113-118。
- 真銅正宏（2006）『大阪のモダニズム』，ゆまに書房。
- 田ノ畑聡史・吉川眞（2004）過去との繋がりを考慮した位置参照点の提案，「地理情報システム学会講演論文集」，13，447-450。
- 橋爪節也（2005）『モダン道頓堀探検 大正、昭和初期の大大阪をあるく』，創元社。
- 名武なつ紀（2006）『地籍台帳・地籍地図〔大阪〕解題』，柏書房。
- 読売新聞（2008）14版，社会，31。